

検察が試される癒着の解明

文科省前局長の

裏口入学贈収賄事件

経済ジャーナリスト

八雲豊彦

文科官僚の倫理欠如

文科省前局長の裏口入学贈収賄事件。次男の医学部入試の点数をかさ上げさせ医大への助成金を不当に支出したとして東京地検特捜部が前局長を受託収賄容疑で逮捕した。国の教育行政の一端を取り仕切りながら裏口入学を求める文科官僚の倫理欠如。古くからある典型的な汚職で、流行のコンプライアンスやガバナンスは何の歯止めにもならなかった。

科学技術学術政策局長だった佐野太容疑者(58)が逮捕された2018年7月4日、文科省に衝撃が走った。前年1月に天下り再就職あっせんが問題となり、当時、事務次官だった前川喜平氏が引責辞任したのに続く不祥事。森友学園への国有地払い下げで大蔵官僚の佐



川宣寿・前国税庁長官(60)が、加計学園の獣医学部新設では経産省官僚の柳瀬唯夫・前経済産業審議官(57)がやり玉に上がったが、監督官庁にもかかわらず文科省に飛び火しなかったことで庁内は息ついた雰囲気だった。ところが、一連の官僚不祥事では最悪の現職官僚の逮捕者を文科省から出したことで、庁内は混乱に陥った。

逮捕容疑は、官房長だった佐野太容疑者(58)が2017年5月、辞

職前の東京医大の白井正彦前理事長(77)から独自研究を助ける私大研究ブランディング事業の対象に選ばれるよう頼まれ、申請で有利に取りはからったという。事業の対象となり、年間3500万の助成を5年間、受けられることが11月に決ると、白井前理事長と鈴木衛前学長(69)は2018年2月の入試で佐野容疑者の次男を合格させるよう学内の入試委員に指示したとしている。

東京医大関係者によると、白井前理事長は2008年に学長に就き2013年に理事長を兼任し、慣例による2期4年の任期を超えてトップを続けてきた。東京医大は17年に事業対象から落選したが、白井前理事長は対象に選ばれることで雪辱を果たし、学内での支配的地位を盤石にする強い動機があったとみられる。

官公庁の職務権限がポイント

一方、佐野容疑者の妻は、文部大臣だった小杉隆氏(82)の長女。早大理工学部大学院を出て文科省に再編される前の旧科技庁に入庁した佐野容疑者は、文教族のドンでもあった小杉氏の威光を背景に大臣秘書官など要職を歴任。旧文部省と樺掛け人事で次官が輩出される慣例で旧科技庁からの次官候補と目されていた。上昇志向が強く、故郷、山梨県にある山梨大副学長に向した際には、知事選出馬の動きもあったが、プライドの高さから自民県議や母校、日川高同窓会の支援を得られず断念したともいわれている。

佐野容疑者と白井前理事長を結びつけたのは、佐野容疑者の容疑を幫助したとして逮捕された医療コンサルティング会社の元役員、谷口浩



司容疑者(47)だった。谷口容疑者は医療業界の利権をめぐり永田町や霞ヶ関界隈で知る人ぞ知る存在だった。

小杉氏の関係者から佐野容疑者と知り合った谷口氏は家族ぐるみでつきあい、飲食の接待のほか、ゴルフバッグの提供していた。佐野容疑者の次男が問題の入試前に英語の勉強の二環としてフィリピンのセブ島を旅行した際、費用を元役員の会社が経費として捻出していたという。

事業対象の選定に対して、佐野容

疑者は「世話になった谷口元役員から『面倒をみてあげて』と言われたので、大学側に助言した」と認めている。しかし、当時、官房長だったことから「職務権限はない」などと容疑を否認している。

立件は、官房長の職務権限は多岐にわたり個別具体的な案件に適用できるかがポイントになる。官僚機構で政治家や上司の意向を「付度」して動くことは森友学園問題での佐川前国税庁長官らの一連の行動で明らかになっているが、事業対象の選定担当者が官房長に「付度」した場合は職務権限を問われる。刑事事件の証拠としてどう認定していくか、文科省関係者から詳しい事情聴取を続けている。

検察の権威をかけた捜査

一方、今回の事件で、白井前理事長と鈴木前学長は逮捕されなかった。佐野容疑者の逮捕後、両者は間もなく理事長と学長のそれぞれの職務を辞任。社会的責任をとり、特捜部の事情聴取に任意で積極的に応じている。捜査協力で罪が減じられる司法取引制度が6月にスタートした

が、特捜部は白田理事長らを拘束しないことで全容解明に必要な供述を引き出し、贈賄罪で在宅起訴し求刑で罰則を減じる戦略とみられる。

大学への功績を実績として学内を牛耳ろうとする白井前理事長には裏口入学との引き替えにした事業選定に強い動機があった。しかし、直接の事業選定への請託と佐野容疑者からの具体的な裏口入学依頼の供述は引き出していないようだ。

この経緯から、佐野容疑者側は、次男が医大を目指していることを知った谷口容疑者は白井理事長と「勝手に加点行為を画策した」というストーリーも描くこともできる。特捜部は職務権限をつめる一方、これをどうつぶすが課題となる。

また、裏口入学の不正加点では、次男の学力が焦点にもなる。次男は「坊ちゃん学校」で知られる私立成蹊高出身で、成績は中位。旧制大学令で大学医学部となった都内8大学の一角を占める東京医大合格にはほど遠い成績だったという。東京医大の入試は1次が学科、2次が面接と論文で、白井容疑者らは点数化に裁量幅が多い2次でかさ上げを画策。

しかし、2次の内容は、かなり悪く、点数が絶対的な1次に10点加算させることを入試担当者に指示していたことがわかった。次男を合格させる強い犯意を示す行為だが、特捜部は、この過程で佐野容疑者から白井前理事長に合格への強要的な言辞もあつた可能性があるとして、詳しく調べているという。

一連の官僚不祥事で「付度」を流行語にした森友問題で大阪地検特捜部が佐川前長官ら関係者を不起訴とし、不正の真偽はともかく、検察に対する国民は不信任感を強めた。東京地検特捜部は今回の事件で検察への信頼を取り戻そうとしている。佐野容疑者らを起訴後、谷口容疑者を贈収賄容疑で再逮捕するとともに新たに文科省前国際統括官の川端和明容疑者(57)を取賄容疑で逮捕、事件は川端容疑者の出稿先だった宇宙航空研究開発機構の業務をめぐる汚職事件に広がった。しかし、佐野容疑者が否認していることで、乗り越えなければならない壁は少なくない。検察の権威をかけた捜査ともいえ、今後の成り行きが注目される。